

先端研究拠点事業（拠点形成型）事後評価結果

領域・分野	農学・農芸化学
拠点機関名	北海道大学・北方生物圏フィールド科学センター
研究交流課題名	シベリアタイガ永久凍土地帯における環境変動の兆候の広域評価
採用期間	平成17年4月1日～平成19年3月31日
日本側コーディネーター（職・氏名）	教授 笹 賀一郎
交流相手国 （国・拠点機関・コーディネーター）	ドイツ：ハレ・ヴィッテンベルグ大学 （Prof. Dr. Georg Guggenberger）

総合的評価

評 価
<input type="checkbox"/> 当初設定された目標は十分達成され、期待以上の成果があった。 <input checked="" type="checkbox"/> 当初設定された目標は概ね達成され、期待どおりの成果があった。 <input type="checkbox"/> 当初設定された目標はある程度達成された。 <input type="checkbox"/> 当初設定された目標は十分には達成されなかった。
コメント
<p>学術的にも社会的にも重要な課題に、従来の情報蓄積が少なく、人跡未踏ともいえるような劣悪なアクセス、野外での研究活動期間が夏季3ヶ月程度という時間的制約、さらには試料輸出制限という政治的・社会的閉鎖性にも拘らず、果敢にも本事業に取り組んだ参加者諸氏のチャレンジ精神と研究のスタンスは高く評価できる。また、日本側5機関とドイツ側8機関の専門研究調査8グループがそれぞれ分担して、実効性の高い調査内容にするため、ワークショップから始まり、シンポジウム、現地調査、検討会など2カ年にわたる各部門での研究サイトの明瞭な比較を行う研究交流計画は、きわめて有効であり、適切な協力連携体制と判断できる。さらには、積極的に若手研究者に貴重な研究経験と教育の場を提供したことも、将来の当該分野の研究と研究協力網の中核を担う人材養成という本事業の目的に合致するものとして評価できる。</p> <p>成果については、新たに得られた情報が学術論文として多くの専門誌や国際セミナーのプロシーディングとして公表され、また、一部生データは、所定の手続きを経て、HP上で一般研究者の利用を可能にしているようであり、情報集約と発信の工夫を徐々に実現しつつあるといえよう。</p> <p>ひとつ消化不良と思われた点は、実績報告書の内容からは、今後の共同研究の方向性がやや不透明であったことである。国際セミナーや現地巡検を通して、参加者諸氏の中では問題点が明らかになったはずであるので、本研究を次の段階へ支障なく発展させていくためには、早急に整理をし、それらを共通認識として、次のアクションプランを作成することが望まれる。</p>

1. これまでの交流を通じての成果

当該研究交流課題を実施したことによる学術的な成果、持続的な協力関係の構築状況、若手研究者の養成への貢献度等、研究交流目標の達成度への評価。

評 価
<input type="checkbox"/> 十分達成された。 <input type="checkbox"/> 概ね達成された。 <input checked="" type="checkbox"/> ある程度達成された。 <input type="checkbox"/> 十分には達成されなかった。
コメント
<p>本研究の達成目標である地点モニタリングから「広域評価への upscaling」がリモートセンシングやGISを用いてどの程度可能になったのか、また、当該地域の森林の「保全・再生戦略」が明らかになったのか、の点が明確ではない。また、本研究課題の最終目標を達成するためにどのような協力関係（役割分担を含めて）を構築しようとしているのかが明確ではない。2年間の短いモニタリング調査では、事前の問題点を絞り、「仮説」などを設定し、焦点を絞る必要があろう。</p> <p>しかしながら、ロシアからの土壌資料の持ち出しが許されなかったために学術成果が当初の期待ほど挙がらなかったとはいえ、日本側とドイツ側とは友好的な協力関係ができたこと、また、日本側およびドイツ側の研究サイトを相互に訪問した際、お互いのサイトが想像以上に異なっていたことが理解できたことは、貴重な経験であり、短期間ながら、グループで調査・検討会を実施を通して、安定的な研究協力関係の構築がなされたものと評価できる。また、個々の研究課題については、その成果が論文として国際誌を含む専門誌やプロシーディングに公表されている点が評価できる。若手研究者養成に関しても国際永久凍土学会で博士課程の学生が優秀若手研究者賞を受賞するなど、交流成果は今後の交流発展に大いに期待できる。</p>

2. 事業の実施状況

事業の実施体制、共同研究やセミナーの実施状況、研究者の交流状況、相手国機関と協力状況、経費の執行状況等の実施状況についての評価。

評 価
<input type="checkbox"/> 非常に効果的に実施された。 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね効果的に実施された。 <input type="checkbox"/> ある程度効果的に実施された。 <input type="checkbox"/> 効果的に実施されたとは言えない。
コメント
<p>日本側5機関とドイツ側8機関の専門研究調査8グループがそれぞれ分担して研究成果を挙げており、適切な協力連携体制と判断できるが、協力機関がやや多すぎるようにも思われる。また、本来は、日本あるいはドイツが「ロシアを相手国」として実施すべき研究課題であろう。量的には適切に研究の成果を公表しているように思えるが、事業名を明記した論文、さらには相手国（ドイツ）研究者との共著論文が少ない（ロシア研究者との共著は多いが）のは、「相手国との共同研究の成果」として十分であると評価すべきか、若干の疑問が残る。</p> <p>しかしながら、条件の異なるフィールド調査を、実効性の高いものにするため、ワークショップから始まり、シンポジウム、現地調査、検討会など各部門で研究サイトの明瞭な比較を行う研究交流計画は、きわめて有効であり、かつドイツと共同シンポジウムを定期的で開催することとなったことは評価してよい。こうした積み上げが状況の異なる困難なフィールドの問題整理と広域評価に繋がるものと期待する。</p>

3. 次年度以降の展望

次年度以降の研究協力体制の維持・発展に向けた展望における計画の適切さ、具体性、実現可能性への評価。

評 価
<input type="checkbox"/> 大いに期待できる。 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね期待できる。 <input type="checkbox"/> 一層の努力が必要である。 <input type="checkbox"/> 期待できない。
コメント
<p>極めて学術的かつ社会的にも重要な課題に挑戦している点で評価できる。開始後2年でドイツとわが国の共同研究の実効を上げることは容易ではないことに鑑みると、モニタリング方法のすり合わせ、サイト間差異の相互理解、蓄積情報の交換と発信が主たる成果であったことは、本事業において、現時点での必要かつ適切な作業を遂行したと評価してよい。</p> <p>一方で、網羅的なモニタリングを短期間（2年）で行うには、ピンポイントとしての「問題意識」を持って、決着を付ける覚悟で調査するべきで、そのための準備不足としての責任は免れず、次年度以降もこれまで通りであれば期待できない。</p> <p>また、本事業で実施された国際セミナーでの研究情報、現地での共同の調査研究は、本交流事業の進展に大きな成果を見せたが、広域評価のための次世代へ向けた保全や再生の戦略までは明らかにされていない。</p> <p>しかしながら、当該研究課題は極めてチャレンジングであり重要である。今後の方向性に対して具体的な目標設定と研究手法について議論を深め、この2年の醸成期間の成果を具体的なアクションプランへと展開して行くことを期待する。</p>